

漢字教育と日本語教育

吉田 富三

(東京大学教授・癌研究所所長 = 故人)

どこの国でも、語の選択は言語生活、特に文章を綴る場合の基本である。その為と同義語(類義語)の辞典類が発達してゐる。我国にも幾種かがあるが、欧米に比べて発達は遅れてゐるやうである。語の選択の発達とは、要するに、言はんとする所を適切平明に表現する言葉は、沢山の同義・類義の言葉の中から、各人が努力してこれを探すものである事を物語ってゐる。その各人の努力によって国の言語は洗練されて行くのであらう。

いま日本語の場合の語の選択を考へてみれば、それは現実に漢字の選択に他ならない。漢字表記の同義・類義語の選択になるのである。

試みに、国立国語研究所報告 21「現代雑誌 90 種の用語用字」の高使用率の七千語とか、同研究所の「分類語彙表」にある三万二千六亘語の五十音訓索引とかを一見すれば、事態は驚くほど明瞭である。そこに見られるものは漢字表記の言葉の列である。仮名書きの言葉は数へるほどしかない。これは、我々が日常使用する語彙の殆んど全部が、一般に漢字で表記されてゐるといふことである。一般に漢

字で書かれるといふことは、漢字で書かなければその語の真の意味が理解されず、他の同義・類義語等との関連の脈絡が失はれるといふことである。この脈絡が失はれることは、一々の語の孤立を意味する。確かに、仮名でその音だけを写された語は、根を断たれた木のやうなもので、思想の中で生きて成長する機能を失ってしまふ。その音写された語を、辛うじて生かし得るのは、その語もとの漢字を知つてみてそれに寄りかかつて理解するからで、その漢字の影が無くなれば、死語の音だけが空しく残つてゐることになる。すなはち、日本人の思考力を支へ、その思想の展開を支へてゐるものは、他ならぬ漢字だといふことである。従つて、日本語における語の選択とは、漢字の選択に他ならないのである。

以上のことを思へば、漢字の制限と、制限外漢字の仮名書き、書き換へ(これは自由な選択とは違ふ)、ませ書き等を強要する国語政策は、暗黒政策といふべきであらう。知性と思考力の圧制といふ他はあるまい。

言葉の選択を自由に、すなはち語句の使用を自由にすれば、古い時代に逆行するとか、難解な漢字語彙が氾濫するだらうとかいふ杞憂は、外国の例を見れば解消すると思ふ。言莫の選択の自由な国々で、昔に逆行したり、難解語が氾濫してゐるだらうか。かへつて、それによって言語が洗練されてゐるのではないか。日本語の場合だけそれが信じられないといふ理由はあるまい。現に今のやうな制限の

なかった明治大正の時代を通じて、逆行や難解漢語の氾濫などはなく、日本語は洗練の一途を辿って来たのではないだろうか。

この観点から、正しい漢字教育こそ、日本語教育の基本であると思ふ。日本人の思考力は漢字にかかってゐる。漢字のない所には人間としての知性の発動もなくなる。日本語はさういふ語彙の言語体系なのである。漢字を学び、漢字を駆使することが、日本語を習得することなのである。この点で、石井勲氏の次のやうな言葉は、傾聴に価すると思ふ。「漢字は国語を学習する手段で、漢字を学ぶことが目的ではない」、また「漢字を教へるのではなく、漢字で国語を教へるのである」。

明治以来の小学校教育では、日本語における漢字の意味を、以上の石井氏の言ふやうには考へてゐなかつた。漢字は仮名をもって容易に置き換へることの出来るもので、日本語の言語体系において、漢字は、いわばお客様か借り物だといふ考へが、その根柢にあり、そこから教育方針が立てられてゐたとしか思へない。この事は、言葉をまず仮名で子供に教へるといふ方針に現はされてゐる。

誰でも小学校一年生になると、戦前は「カタカナ」、戦後は「ひらがな」で国語を教へられた経験をもつてゐる。それは明治以来不動の教育方針だったから、全日本人共通の経験である。人々は、ハタ・タコ・コマといった風に学習した共通の経験をお互ひに懐しい思ひこそすれ、これが果たして正しい国語教育法であったかなどと疑つてみた

者は、まづいないだらう。漢字は子供にはむづかしいから、まづやさしい仮名から始めて、やがて漢字に移るといふ方式は、だれにも納得される自明の手段だと考へられてゐた。

これに対して疑ひをもつたのが、石井勲氏である。石井氏の提案とは、次のやうなものである。「社会で、一般に漢字を用ひて表記してゐる言葉は、相手がたとへ小学校の一年生であっても、最初から漢字で表記して提出し、指導しなくてはならない。」

つまり、既に言葉として一年生に適當であり、それが社会一般には漢字で通用してゐる言葉なら、一年生の最初から漢字で教へよ、という方針である。氏は、社会一般の用語法とは別に「子供用の用語法」を設けてはならないと主張してゐるのである。

このやうな氏の根柢は、氏の書かれたものから、大体次のやうに要約されよう。

- 一、漢字を表音文字に対立させて表意文字と考へるのは誤つてゐる。漢字は「部首」とよばれる部品を組合はせて作られ、部首の多少で一字一字の字画は様々になるが、総て音と同時に意味を現はしてゐる。ローマ字や仮名などのやうな(表音)文字と同列視すべきものではない。漢字は語 word なので、「表語文字」と呼ぶ方が正しい。
- 二、英語の学習に、アルファベットだけを覚えても何にもならない。mountain, river などの word を一語一語学習して、それが二千、

三千に達しなければ、読むにも書くにも役に立たない。山・川という漢字は mountain, river に対応する語なのだ。とすれば、二千、三千の漢字学習を、他国語の学習に比べて、過度の負担だとする理由はない。

三、漢字は字画に分解されるもので、それは mountain m, o, u, n, t, a, i, n の分解と同じである。「漢字のアルファベット」は、字画だと考えればよいのである。(この点は氏の著書『漢字の神話』に詳しく、そこで氏は漢字そのものの学び方を説いてある)

四、普通、人は字を読む時、語形を一目見て理解し、それを組立てている文字を一々見てはみない。アルファベットを組合はせた一語は、一つの語形を作り、その語形はやがて固定化して、固定化した語形の映像は、表意文字の価値を得て、結局は漢字と同様の機能をもつのである。英語などの外国語でも、重要なのは固定化した語形なのだ。

「がっこう」という表記に児童を習熟させて、その語形が固定化して行く頃になって、それを「学校」といふ異なった表記に切り替へやうとすると、先入の語形が邪魔をして混乱を起し、後からの漢字の学習が困難になる。これは表記学習といふものの性格なのだ。

五、仮名書きといふ子供用の用字法を特殊に設けて、それを先習させた従来の指導法は、とんでもない間違いで、わざわざ国

字・国語の学習を困難なものにしてゐたのである。一年生にも社会の用字法に従って、必ず、最初から「ほんもの」の表記を与へれば(漢字で書かれる語は最初から漢字で教へれば)、それだけで今までとは比較にならぬ漢字学習の効果をあげ得る。従来のやり方では、一年生はどんな能力のある子供でも、50字以上の漢字を学ぶことは出来ないが、石井方式では、少なくとも三百字から四百字を学び、その大部分を習得することが出来る。(これは15年間の実施の成績が証明してゐる)

以上が石井方式の骨子であるが、氏はこれを新発明でも何でもないと書いてゐる。言葉は、特別な「子供用字法」などを設けずに、最初から「ほんもの」を教へるのが、世界の常識である。この世界のどこでも行つてゐる正書法的学習を、日本でもやるべしと主張するに過ぎないのだ、と石井氏は言ふのだが、私は日本においては、これは重大な発見といふべきであると思ふ。私はこの石井方式は、漢字教育のみならず、日本語教育の本道の扉を開いたものはないかと思ふ。何事にも大切なのは正しい方法である。正しい日本語教育の方法も、この石井方式に更に研究を加へ、経験を積んで行くことによって、やがて打ち立てられる期待がもてる、と思ふのである。(かな遣い原文のまま)

(「漢字漢文」昭和47年6月号)